

秋田

——生きる術を、行事に託して



日本海に張り出す男鹿半島は、昔ながらの美しい光景を保っていた。西には真山、本山、毛無山と男鹿の山々が、東には寒風山がそびえる。この真山地区こそ、なまはげ発祥の地といわれる土地。一見ただけでは、おそろしげで強烈な印象の強いなまはげ行事には、この厳寒の地に生きる人々の、見事な工夫が随所にちりばめられていた。

取材・文 木内 昇 写真 谷山 實

なまはげを描いた最古の史料、菅江真澄の「男鹿の寒風」。愛知から北陸、東北と諸国を旅し、男鹿の紀行文も5冊ある（秋田県立博物館蔵写本）。



「なまはげ」と聞けば、誰しもすぐにその映像を思い浮かべることが出来るだろう。怖ろしい形相の鬼たちが、片手に出刃包丁を持って「泣く子はいねがー?」と家中を暴れ回り、子供たちは怖がって泣き叫ぶ——けれど考えてみれば、この行事に関してそれ以外のことを、私たちはよく知らないのでは

ないだろうか。

なまはげは、秋田県西部に位置する男鹿半島に数百年前から息づき、一九七八年には国の重要無形民俗文化財に指定された伝統行事である。けれど、意外なことにその起こりには謎が多い。一説には、漢の武帝が男鹿に連れてきた五匹の鬼が始まりだと言われ、また一説には、ロシア船で漂着した異人を模したものとも言われる。起源が定かでないのは、口伝で続いてきたためだろう。いくつかの資料や絵が残っているが、江戸時代に諸国を旅して多くの紀行文を残した菅江真澄が描いた『男鹿の寒風』の詞書きと図絵以外は、ほとんどが近代のもので、古文書のたぐいは現存しない。

なまはげ発祥の地といわれ、また男鹿三山のひとつである真山の鎮座する、真山神社の武内信彦宮司は言う。

「解釈もさまざまです。真山地区では、お山の神様と考えられていますね。今は大みそかに行われますが、昔は小正月（二月十五日）になまはげ行事が行われていました。旧暦ですと、その日は一年で最初の満月になります。ですから神様からお力をいただけると考えられていました。ちょうどその頃は、馬そりや田んぼに肥やしを



なまはげの動きは大きく、建具をすさまじい音で開け閉めするのは大迫力。目の部分には大きな穴が空いているが意外と中の顔は見えない（右）。なまはげ問答も館内で演じられる。なまはげは2杯酒を飲み、3杯目は家主が飲むしきたり（上）。男鹿真山伝承館の建物と隣にある曲屋だ（下）。





なまはげ館では、行事の様子をビデオ上映でわかりやすく解説。海外からの観光客も多い（上左）。解説員の小早淳さん（上右）。館内には小早さんたちが集めた、市内約60地区のなまはげ装束が展示されている（下）。収集は、何度も村に足を運び、住人を懐柔することからはじめたという。



運ぶ『事始め』の時期でもあったので、豊作を祈願したのでしよう。他にも、先祖の霊が、小正月にも里におりてくるという説もありますね」

つまり、豊作豊漁祈願と先祖供養、家内安全といった村人たちの願いを一手に引き受けてきたのが、このなまはげということになる。ちなみに、「なまはげ」という言葉は、「なもみはぎ」がなまったもの。「なもみ」とは、いろりに長く当たっていると手足にできる火型のことで、なまはげが刃物を持っているのは、その「なもみ」を剥ぎと

る、つまり怠け者を諷めるためだと言われる。そう聞くと、あの扮装となった理由がよくわかる。

なまはげの面や装束は地区によってまったく違う

なまはげ装束は、大きく厳つい面、その年に収穫した藁で編んだ藁状のケデ、足に巻き付けるハバキ、腕巻き、わら杓からなっている。すべて身体を大きく見せるためにつけるものだが、実はこの装束、男鹿に八〇あるそれぞれの地区によってまったく異なるというのだ。ハバキの編み方ひとつとつ

ても集落ごとに特徴があり、面に至っては全部で二〇〇を超えるデザインがあるというから驚きである。真山地区に一九九九年にオープンしたなまはげ館には、各地区の面が一堂に会し展示されている。なるほど、形状も材質もまったく違う。太い角をつけた般若のような面もあれば、丸顔で愛嬌のある面も。村々を回

りこれらの面を収集した一人・解説員の小早淳さんは、そのきっかけをこう語る。

「以前、たまたま他の地区に行ったとき、祠の中に真つ黒な面が置いてあったのを見つけたんです。これが、自分たちの地区とはまったく違う造りで驚いてね。そのとき一緒にいた私の中学生の頃の恩師が、『各地区の面を収集する価値があるのではないか』とおっしゃったのがはじまりでした」

この「恩師」とは、男鹿市文化財保護審議会の会長も務めた磯村朝次郎氏。男鹿の文化風習に精通した「生き字引と言われる方」（武内さん）だ。小早さんはその師につき、面を求めて他の地区を訪ね歩いた。

「でも面の保管場所を聞き出すに苦労でした。なまはげは神の使いで、地域で大事に育んできたものですから、簡単に外に出さなかつたということです。おかげで、ここまで集まるのに四〇年を費やしました」と小早さん。密事、という意味合いが昔は濃かったのだろうか。男鹿の人々はいく最近までよその地区の面を見る機会がなかつたのだという。

「なまはげには作法があるのです

が、それも地区によって多少違います」と武内さんも言う。真山地区の場合、まず先立ちと呼ばれる使者が家を訪れる。なまはげは二匹で一組になり、家にやってくる。上がる前に玄関で七回、四股を踏んでから上がり込み、大きな声を出して暴れるのだ。家の主人はなまはげをなだめ、おゼんの前に座らせる。なまはげは五回、四股を踏んでから座につき、盃をあける。そこではじまるのが、なまはげ問答と言われるもの。

「前もってその家の人が家族のことを伝えておくんです。例えば子供が勉強しないとか、悪さして困るということを。それをなまはげは把握して、家ごとに問答の内容を変えていきます」

問答が終わると主人は一年無事に過ごせた感謝を述べ、なまはげは新たな一年の豊作、豊漁、家内安全などを約束する。なまはげは立ち上がって三回、四股を踏み、再び家中を暴れ回ってから出ていく。最後にかます持ちと呼ばれる付き人に、家人がご祝儀や餅などのお礼を渡して儀式が終わるのだ。

なまはげに扮するのは、未婚の若者と決められていた。普段の素行や体力を認められた者が選ばれ



真山神社では毎年正月3日に五穀豊穡を願う柴灯祭が、2月第2金土日には、なまはげ柴灯まつりが行われる（右下）。宮司の武内信彦さん（左下）。丸木船の復元・展示も武内さんが手掛ける大事な仕事のひとつ（左）。古くから人々の暮らしを支えてきた行事や産業を残す努力は並大抵ではない。



る。小早さんは言う。

「若者であれば全員がなれるというわけではなかったから、昔は名誉な役でした。もちろん酒を飲ま

されるから酔うんですよ。でも先立ちやかます持ちをする大人が見てね、まずいとなったら他の者と代わらせる。だから安心して演じられたんですね」

「それにその昔は、なまはげにとっても鬱憤晴らしの場でしたからね」と、武内さん。村人の多くが農業に従事していた時代、地域の中で地主と小作という主従関係があった。なまはげに扮するのは主に、若勢と呼ばれる小作人の若者。彼らが神様となって主人の家にいき、無礼講で問答をする。つまりその夜だけ主従の関係が逆になり、若勢も一年間地道に働いたストレスを発散できるという仕組みなのだ。

「面をかぶると誰かわからないから、なまはげも思い切りやるでしょ。でも少々やりすぎてもね、しょうがないな程度で済むんですよ。それが山の神様、

歳神様だという考えをみんな持っていましたから」

なまはげの意味を正しく伝えるために

これだけ地域性の濃かったなまはげが一躍全国区になったのは、観光のため広く宣伝したこと、また地方の文化が見直されるようになってきた中で、圧倒的な存在感があるなまはげにスポットが当たったという要因がある。が、有名になるとそのぶん弊害も生まれた。行事の一部分だけが報道されたことにより、「子供を虐待している」などという見当違いな批判が外から寄せられるようになったのだ。神聖な行事が、ゆがんだ形で広まっていく。武内さんはそれを危惧し、一九九六年、真山神社境内に百年前の民家を移築して、男鹿真山伝承館をオープンした。なまはげの実演を行い、行事の全容を訪れる人に体験してもらっている。武内さんは言う。

「秋田市内のホテルなどで見るなまはげが、本来の姿だと観光客が信じてしまうのは抵抗もありました。しかもそのイベントのために男鹿から人手を出さねばならず、地域の行事がおろそかになるとい

う本末転倒なことが起こりはじめたんです。ならば、いっそ観光客にもなまはげが生まれた男鹿に来ていただき、行事を体験してもらったほうがいいじゃないか、と考えたんです」

「私から見れば、どこにでもなまはげが出ているのは、非常に残念といふかな。もうちょっと神秘性があってもいいと思うんですよ」と小早さんも語る。

武内さんは他にも、真山神社を中心になまはげに造詣が深い方々による、「日本海域文化研究所」を発足させて恒常的に調査を行うようにし、二〇〇四年には写真集『ナマハゲ―その面と習俗―』を発刊するなど、正しい伝承に力をつけている。

「地元では『貴重な行事だ』という認識があまりなかったんですよ。昔から当たり前にあったものだからね。なまはげ館を作るにも、一八年間、行政に訴えてやっと実現したくらいですから。その間、ずっと夢を諦めなかったんですよ。地域にはバカ者が必要だとよく言いますが、ほんとにそうだね（笑）」

武内さんの努力の背景には、なまはげ行事の縮小化という厳しい現実もある。村に若者が少なくな



真山神社に程近い坂の途中に立つ万体仏の御堂。壁面から天井まで木の仏様が約一万体並ぶ。亡くなった子供たちの供養にと、江戸時代に僧普明が刻んだといわれている。

り、なまはげのなり手が減った。また迎える側も、神棚を飾ったり料理を作るなど手間がかかるため、来訪を嫌がるようになった。なまはげはその年に不幸があった家には入ることはできない。だから本来、その来訪は感謝すべきものののだが……。今や、真山地区でも、約六五戸のうちなまはげが家に入れるのは一五戸にまで減少しているという。

「今は、農業にしてもトラクターも肥料もある。勤め人も多くなっている。地域で協力しなくても生きていけるようになって、目に見えないものにお願いをするという気持ちで薄れてしまったのかもしれない」

地域を愛し、守るという 気持ちを育む儀式

武内さんは、子供の頃に見たなまはげの印象をこう語る。

「怖くてねえ。だから、どこに隠れたら見つからずに済むか、必死で考えましたよ。天井裏まで上ったり、風呂に入ったり(笑)」

子供は物陰に隠れ、息を潜める。なまはげがおどろおどろしい声を上げて、家中を歩き回る振動が伝わってくる。小さくすくめた身に、

なまはげをなだめる親の声が聞こえてくる。「うちの子は悪い子ではないよ、勉強も手伝いもしますから」と。いつも叱ってばかりの親が、自分を守ろうとしてくれてる。子供は小さく驚き、その愛情に触れる。ついになまはげに見つかって連れて行かれそうになったときも、父親は必死に手を差しのべ、奪い返そうとするのだ。怖い。らしいなまはげの腕から解放され、父の胸に抱かれた子供はどれほどの安堵に包まれるだろう。

「そこでね、おやじの強さや優しさをはっきり体験するんですよ。おやじというのは、すごいんだ、いざというときには家の者を守ってくれるんだ、というのを見せられる。そうすると自分もまた、大人になったときこうやって家の中を守らなきゃいけないという意識が芽生えるんですね」

なまはげ行事の意味というのはきくと、そういう気持ちを育むためにあったのだ。家を守る、地域を守るという気持ちを。なまはげは、去り際にこんな言葉を残す。「おめ(おまえ)のことは山の上からちゃんとしてるからな」

「この辺では冬になると、お父さん、おじいさんは出稼ぎで家にい

ないんです。そうすると男の子は言うことを聞かないでしょ。だからなまはげが父親がわりという意味合いもあったんでしょう」

知れば知るほど、実にうまくできている。村を潤滑に循環させるための工夫が、たったひとつの行事に幾重にも織り込まれている。こういうものを「英知」というのだろう。

世界は、目に見えるものだけで成り立っているのではない。自分の行いは、誰かがどこでちゃんと見ている。そういう畏敬や信仰が、人を律し、自然を守り、村の融和につながったのだ。

「その気持ちが減っていく時間を少しでも止めるために、地域に根差した文化を続けたいんです。それをみんなが大事にすることで、つながりを生むかもしれないです。から」と武内さんは言う。

伝える、ということとはとても難しい。もちろんマニュアルや規約を作れば、表面的な形を残すことはできるだろう。けれど、その奥底に流れる意味や、そこに宿る心根を感じることがない限り、本当の意味でなにかが伝わっていくことはないような気がする。なまはげの行事にはちゃんと「心」があ



秋田市内から電車で約1時間。日本海を望む男鹿半島は、かつて山岳修験の地。半島の中央には寒風山がそびえる。

る。家族や地域を愛おしみ、厳しい気候に打ち勝ち、自分の在所を守っていききたいという先人の願いや思いが。なまはげに扮する者も、それを受け入れる者も、その思いを感じてきたからこそ、行事は潰えることなく続いてきたのではないだろうか。

雪深い夜の道を、なまはげがやってくる。その幽玄な美しさは、この地にあつてこそ成り立つものだ。なまはげを時に戒めとし、時に励みにしながら、村人たちが長い間大切に守ってきた土地。そうした気高い景観が、男鹿には、まだ確かにあるのだ。